

## 一、浪人礼讃

山に登るには仄路に耐えなければならぬ。雪見をするには危橋を踏み越えなければその醍醐味は味わえぬ。折角の開居に俗漢が訪れて、くだらぬ長談義に静福を乱されることもある。花を觀賞する時には、えてして悪酒も辛抱して飲まなければならぬものだといわれる。

確かにそれらはそれぞれ思い当たる節々である。してみると神様は人の子に対し案外公平であられるように思われる。安直に苦勞をしないで、いい換えれば、それ相当のコストを支払わないで人生を享樂しようなどという横着さは認められないようである。

私は、柄にもなく丸四年の間、政府の仕事をした。それは来る日も来る日も、時間の枠にはめられたストレスの連続であり、形の上ではあらかじめ仕組まれたスケジュールを、ベルト・コンベアーに乗って消化して行くような味気ない機械的なものであった。深くものを考えることもなく、その場合々々におけるいわば「出たとこ勝負」の繰り返しであった。今から考えてみる

と、何故あの場合あいう措置をしたか、顧みてハラハラするようなことが多い。マスコミではめられるよりは、悪くいわれなしかと心配することが多かった。友人の間では祝福される場合よりは、ジェラシーの的になる方が多かったのではないかと思う。

政府を退いておる今日と雖も、閑雲野鶴を楽しむ程の暇はもとよりのない。日々雑務に忙殺される不自由さに変わりはないといえよう。それにしても、寸秒を争うスケジュールに因るストレスから解放されておることは何としてもうれしい。また好きな書物をあてどもなく繙いて、今人故人と密かな対話をたのしむこともできる。政治の舞台で主役を演ずる人々の心理なり演技なりを一定の距離をおいて觀賞することもできる。悪口やジェラシーの燃焼する場所より遠ざかることもできる。それよりも何よりも、自分というものを、世間というものを、割合い均衡のとれた状態で客観視することができるとは有難いことだ。

こういう我儘は、いつまでも許されることではなからうが、若しこのまま人生の終着点に辿りつくということになっても、悔いる必要はあるまい。

(昭、四二・八・二二 「又信」)